

## 罪と死

鍊瓶の湯がこんこんと煮えたぎっている。香の煙がゆらゆらと静かに室の内に青い輪を作つて消えて行く。

春の日の午後、うつとりとした夢のような心地で、じつと疲れた体を机によせてペンを持つ。一分二分……私の魂は自分の内をぬけ出でて方々を駆けめぐる。ホツと自分にもどる。又昨日、熊野町で懐しい法の友と別れた悲しい場面を思いうかべる。たつた五日間だけけれど、淋しい人と人をつなぐ慈悲の涙、六字の同朋のつどいほど涙ぐましいものはない。

「先生すぐ禿て下さい。」  
「お体御大事に……たのみますよ。」

どなたの目にも涙ばかり、声を立てて泣く方さえある。見送りの方々が次第々々に減つて、二里歩いて矢野駅についた時が、光本、女夫池、久保隅の三法兄、鹿島までと言われるのをここでと断る。毎日毎晩数百の聴衆が会場に入りきれない位集つて下さる。たまらなくなつた人たちが朝起きるときから、夜一時二時まで側をはなれないで、全てを突破して体験にまでと、熱心に求められる。朝から夜まで口の休められない時がない。どうしてもわからないと苦しむ人、わかつて泣き伏す人、とてもわからないとなげていた人が、たつた一口であまりのあつけなさに、思はずふき出して笑つてしまう人、とにかく、かくして先月からちつとの休みなしの講演に、疲れてしまつた私は、こうした涙に充された記憶をたどつて、今日はじめの休みに原稿を書き了りたい。

熊野町での講演、一日たつて二日暮れても、あれだけの聴衆があり、あれだけの示談を求める人が一日中を寄せて来るのに、ちつとも生れない。まるで手ごたえがない。私は不審だつた。求めて来る人が熱心であればあるだけ仕方がない。どうしたのであろう。私が先に行つたのは十二月末であつたが、それから九十日間別れた。次の日から待つたという人もあるのに、さつぱり齒がたたない。何故だろう。聞く人ももう二日たつた。この度もわからずにしまうのだろうかとあせられる。私も他の地方と全く様子がちがうているのにあきれる。いったい何所がこんなにもむずかしい原因なのだろう。とうとう私にはある光明が見えて来ました。そうして私は思ひきつて今までの型をこわしたいと思つて、更に根本にたちかえりました。

各地方を巡つて、平等に見出される現今のいわゆる真宗の通弊は、大体次の通りであります。

一、弥陀仏とは、私どもの自力の種になるはからいが行詰つて、人間的知の役だたないところにひらめく絶対救済、無条件救済の仏である。然るに、滑稽というか、気の毒と言おうか、現に如来様は高大な御慈悲な仏であるとして念しかしながら、では救われませんかと言え、それがわからぬと言う。つまり自分が救われるということをやほつておいて、聞いた話によつて自力構想の仏を作つて、それに自分をあてはめようとしていること、それは救済を求める者の全部といつてもよい。

喜べるようになったら、腹が立たぬようになったら、そんなところはまだ極めて初步であるが、自分の総てを救済に合わせようとする。

二、地獄ということは、全く自分を離れて存在するものではない。然るに多くは地獄を幼稚に恐れて、極楽は楽しい国と聞いて、永劫にこの恐れをはなれて、楽しみたいという功利心から、どうにかして 極楽にまいりたい、行きたい、とあせつてその功利心の満足のために、信仰を得たいと思つている。

蓮如上人は「されば極楽は、たのしむと聞いて参らんと願いのぞむ人は仏にならず。弥陀をたのむ人は仏になると仰せられ候。」(御一代聞書一二二)と申された。宗教は断じて功利主義のものではない。元来自己の罪を考へることなしの地獄を考へていゝるそれらの人たちは、もし地獄はないと証明でもされると、信仰は不必要だと言つてしまふであらう。地獄とか極楽とかいふ問題は、有無の議論を超越した問題で、自己の魂にのぞきこんでのみ考へることの出来る、必然の世界である。有ると証明されるからあるとか、無いと断定されるなら信じないとかいふ問題ではない。三世因果といふことは仏教の背景となつた真理である。否我等の生命がかく求めるのである。自分の現実を考へずに単に地獄と聞いて怖れ、極楽と聞いてまいりたいと考へるなどは、幼稚な人の宗教心である。決してかかる功利主義の上に弥陀の救済は知られては来ない。

三、夜も寝られないほど気にかかるという方で、滅多にお救いを体験しない人はないが、中には「み仏様も(我を救済する)いなさる。私は地獄者、み仏様はこの落ちねばならぬ機を救つて下さるお方とは、よくよく承知してはいますけれど、どうもどうもこの機が聞いてくれませぬ。聞かぬこの機がおめあてと聞かされても承知が出来ませぬ。」と、いわゆる、在来真宗聞法者の通弊を聞かされます。至るところ訪ねて来る人は、全部というほどこれである。

こうした人は自分の胸で、種々なる自力の考へにやつれて、自分の心に教をひねくつて、自力の信を築きあげようとあせる人である。万劫たつても信のとれる時はない。いたずらなる議論や、煩雑な機の動きかたばかりをもてあそんでいる者の多いことは、おどろくばかりである。この地獄者と自分をかたづけ、極楽と仏とを予想して、胸の疑いをもつて苦しむ人は、長いのは数年間も迷い狂うのである。

糸の片端にとめ結びを造らないで針を使うように、いくら聞いても聞かしても、益々わからなくなるばかり、胸は苦しく夜もねられない。こうした一日二日が続いて後、私はその根本が知られてきた。それはいつたい信仰とは何であるかを知らないで、一途に信心が得たいとあせつていゝることである。弥陀の救済は一体何処に立てられてあるか。

私どもは何ものをもおそれないでいい。唯々我々の日常生活が根本を無明におき、罪悪煩惱に暮し明されていることである。罪以外に何ものをもおそれることはない。心中に燃え上る三毒の煩惱の炎をどうしよう、この罪悪にのみ救済は必要である。

罪悪のみをおそれよ！ 迷妄の生活のみを恐れよ！ 罪悪生活の上に死の幕が下される。死と罪、この二つをおそれよ。実に信仰はここにその出発点を見出される。

弥陀の救済は、罪惡の上にうちたてられてある。死に勤しては無量寿と、無量光とが与えられる。

私が「死と罪」との題で講演した翌日からであった。いらないつまらぬ議論や、信心頂戴のためのいらざる閑事はやめられた。そうして真剣なる人の大部分は仏陀慈光に撰取された味をとって下さいました。

私どもは信心頂戴をあせる前に、まず救うべからざる自分であることを信知せねばなりません。罪と知つて改めず、惡と知つて懺悔せず、死と聞いて気にかげず、地獄一定と聞いて何ともない。全く救うべからざる魂の内の惡性についておどろかねばならぬ。

絶対救済のお味わいが知れて、泣き伏したもう法友にお問い申します。

「法兄は今、誠哉の涙にむせんだ時、地獄とか極樂とか、他力とか自力とか、信心とか安心とか、そんな言葉や概念が問題でしたか。」

「いいえ何もありませんでした。唯、今まで聞いていた全ての知識、言葉等が間にあはず、ただビリツと全靈に言うべからざる感じが浮んで、疑いは何処かへ消え去ってしまいました。」

信仰には証拠がない。証明がない。何も無いのに安心が出来る。

行詰つた自分が何もありませんに、行詰つた胸は開かれ、地獄一定の機のままが、大願業力に動かされて安心が出来るのである。

地獄とか極樂とか、他力とか自力とか、信心とかは、単なる言葉である。せつぱつまつた我が全体の上に「我汝を救う」の勅命がわがものとなる時には、それらの言葉も知識も役立たない。唯そこには、救われたる自分を見出すだけである。内からほんとの念仏がとび出すのである。